



Title	虞世南 : その書と人
Author(s)	塘, 耕次
Citation	懐徳. 1976, 46, p. 34-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90541
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

虞世南

—その書と人—

塘耕次

一 はじめに

二 世南の経歴と人物

三 世南の書

四 おわりに

一

六朝時代に藝術・文學・宗教など文化面に開かれた人々の目は、言うまでもなく書にも向けられ、王氏一族をはじめ後世に名を残す偉大な書家を輩出させ、書の黄金期を迎えた。南北を統一した隋は短命の王朝であったが、しかし、書は前代を受けて盛んであり、釋智永・丁道護・趙孝逸・房彦謙らを生み出した。そして唐に至り、書は六朝の余波を受けて極盛に達した。蓋し、著名人の多さという点で、唐はあらゆる時代にもまして最たるものと言つてよからう。その原因として、この時代は太宗・玄宗・肅宗をはじめとし、能書家の天子が多く位に立つ

たという事實があげられる。更に『書道簡史』を著わした祝嘉は、その中で考試において書法を重視した結果であろうと述べている(第十章、唐朝的書學)。つまり、科舉制度の中に明書科が設けられたのである。この二事が著名人を輩出させた大きな原因、なかならず後者がより大きな原因であつたと思われるが、しかし、このことは一方で大きな缺點をも生み出すこととなつた。つまり、唐の士大夫の字はおおむね科舉の習氣がある(『續書譜』眞)、唐人の筆には晋魏の飄逸の氣が無い(同上)、法度に拘束されて逸氣が無い(『山谷題跋』卷五、跋東坡帖後)と、後世非難されるが如き缺點である。

事實、考試で重視されたのは、規に應じ矩に入る、或は整整齊齊、規規矩矩と評されるような嚴格な法則に適つた楷書體であつた。そこで、唐も開元・天寶の時代になると、余り法度に拘束されすぎた書に不満をいだく人々が登場し、新しい書のあり方を追求するようになった。

つまり、張旭・賀知章・懷素らが出て、唐の書壇に新風を送りこむ様相を呈するのである。

小論において、虞世南をとり上げるのは彼が唐の書壇を代表する楷書の大家であると同時に、一方でその書が狂草の創始者といわれ、數々の逸話を持つ張旭にも影響を與えた人物として、とりわけ興味深いからである。

由來、書は人を表わすと言われる。例えば顔眞卿の剛直な性格はその書の上に充分示されているように。そこで小論においても、世南の本質を理解するため、まず彼の經歷に觸れてみたい。次に經歷から彼の性格を探り、その性格と書の關係に觸れ、更に彼の書は法度に拘束されたとされる唐代の書の中でも、狂草の派へ影響を與えた點で一異彩をはなつものであるという順序で述べていきたい。

結論から先に述べれば、世南の經歷から筆者は彼の性格の際立った二面性を探り得た。一は氣骨であり、一は溫恭豈弟である。そして、その性格を、彼の書作品と深く關わりあうものと見なした。

つまり、彼は書の中でも嚴格な法則に適った楷書體を最も得意としたが、しかしその書は悠揚としてせまらぬ穩健で柔らかな特色を兼ね備えている。この特色を、その氣骨と溫恭豈弟に對比させて理解したのである。そし

て最後に、世南書の持つこの穩健で柔らかな特色が恐らく張旭に刺戟を與え、狂草というスタイルの中へ發展解消されていった、この點世南は初唐の書家の中でも異色の存在であった、ということ述べたのである。

一一

世南の經歷を示す資料は『舊唐書』卷七十二、並びに『新唐書』卷一百二の本傳である。この章ではこれらを基礎資料とし、随時他書も参考にしながら彼の經歷、並びに若干のエピソードに觸れていきたい。

虞世南（五五八—六一三）は、字は伯施。越州餘姚の人である。祖父の檢は梁の始興王の諮議、父の荔は陳の太子中庶子であり、ともに重名があつた。叔父寄は陳の中書侍郎であつたが、子が無かつたので、世南は出て寄の家を繼いだとされる。

世南は若くして世基とともに吳郡の顧野王に學を受け、十余年彼の門で學んだ。そのひたすら學問に打ちこむ姿は「篤志勤學」「精思不倦、或累旬不盥櫛」と評され、かなりの努力勤勉家であつた。因みに、顧野王は『玉篇』の著者として名を残しているが、七歳で五經を讀み、九歳で能く文をつづり、十二歳で『建安地記』二篇を撰した。長ずるに及び、天文地理・著龜占候・蟲篆奇字など、

通ぜざる所無し(『陳書』卷三十、本傳)と言われた博學の大才である。同時に、侯景の亂の際、賊軍に徹底して反抗した人物として知られている。後に世南は、博學、また辭章贍博と稱される、或は後述するように烈烈たる氣骨を示すが、これらは並びに若い頃、師として仰いだ顧野王の影響も少なくないであろう。

一方、書は吳郡の沙門、智永に師事した。言うまでもなく智永は王羲之七世の孫にあたる人で、王氏家傳の書法を當時に傳えていた。南朝の人々にとり書聖羲之の名は頗に高まつていた。梁の虞龢『論書表』に載る庾翼の言葉がこれを示すが、智永の書を求める者が門前に群がり、そのため門限を鐵で保護した、という記録がそれを如實雄辯に物語っている。

後世、羲之の書に通曉するまで三十年間永欣寺の傍に建てた樓に籠り通した。或は張芝の臨池に對するに筆塚の故事を以てされる智永のもと世南も持ち前の努力勤勉で羲之の書の秘奥を極めようと懸命に學んだことであろう。

陳の天嘉中(五六〇—五六五)には父の荔の死という悲運に遭遇した。父の死は年代から推せば世南の二歳から七歳までの間である。正史は世南がその死に際し、幼少であったにもかかわらず、哀しみにうちひしがれ、殆ど

喪にたえないほどであった、と記録している(『舊唐書』)。その悲嘆のほどと、早熟で繊細な感受性を知ることができる。ところで、この頃、叔父の寄が陳寶應の軍に陥るといふ悲運にも見舞われた。しかし、寄るべない彼らに暖かい手をさし伸べたのはその博學を愛したと言われる陳の文帝であった。恐らく、彼の援助によって、世南は建安王法曹參軍、西陽王の友の地位を歴任した。

ところで、陳は内治に意を注いだ文帝、名將吳明徹を擁した宣帝と國運隆盛であったが、後主が即位すると徐陵・江總など文學の大家を生み出す一方、國力は甚だしく衰退した。彼らが奢侈遊宴を好み、政治をいっこうに顧りみなかつたためである。隋の文帝は早くから南征の計畫を持っていたが、後主が奢侈遊宴に耽るを見、滅亡の期至れるを察した。そこで楊廣(煬帝)を總指揮者に任じ、建康をおとし、陳を滅ぼし、ついにここに南北の統一を達成したのである。時に西歷五八九年。この年、世南は兄とともに、隋の都長安に入ったが、二兄弟ともに聲名があり、晋の文豪、陸機、陸雲に比擬されたと言われる。

ここで注意すべきは、後世書の名家とされる世南も、この時期、書家としてまだ名を成すに至らなかつた。或は文章家としての名が書家としての名を掩っていた、と

いう事實である。『新唐書』にも「文章はあでやかにはなやぎ、僕射徐陵を慕った」、「舊唐書」にも「二兄弟の文章は隋唐の際に光彩を發はなった」とある。思うに世南自身も若い頃は書よりも文章に意を注いでいたのかも知れない。その結果が陸機・陸雲に比擬されるという事實となって現われたのであろう。

さて、隋に入ると兄弟ともに煬帝に仕えた。ところで、兄の世基が巧妙に立ち回って寵愛され「妻子被服、擬於王者」（『舊唐書』）と言われるほど重用される一方、世南は秘書郎、起居舎人の官に留まったばかりで、「躬履勤儉、不失素業」（『舊唐書』）、「躬貧約、一不改」（『新唐書』）と位階、生活ともに低きに甘んじて送った。性格のあまりの「峭正」が煬帝に嫌われたのである。しかし、このことは却って世南の後の人生のためには幸運だったようである。

『貞觀政要』には、世基に関する記録が二、三見えるがそれらは煬帝の暴虐、矜誇を諫めず、隋を滅亡に導いたという非難の記録である（求諫篇 君臣鑒戒篇）。これに對し、世南は任賢篇虞世南の項をはじめ、直言極諫の士として稱揚されている。

この時代、世南の文學的手腕を示す業績としては、秘書郎の時に、現存する最古の類書『北堂書鈔』を撰した

くらいであり、他にとりたてて論ずべきものはなかった。蓋し、世南は兄の官界榮達を喜びながらも、一方で薈々たる日々を送っていたと思われる。

しかし、隋の命脈も長くは續かなかつた。強大な中央集權を急いだ隋は、その初期にすでに各地に豪族の反抗運動が強かつたのである。しかも煬帝が位に即き、外征を頻繁に行ない、大運河開鑿などの土木事業を起すこと、各地に農民暴動が頻發し、群雄割據の形勢を見るに至つた。その中の一人が山西省太原出身の唐公李淵（唐の高祖）であつた。同じく隋にとつてかわらうとする勢力は、李密・杜伏威・薛舉・王世充・竇建德などである。

唐の武徳元年（六一八）、煬帝は江都の離宮にあり、中原のすでに亂れるのを見て北歸の心を失い、日々淫虐に耽つていた。當時、右屯衛將軍として駕に従つていた宇文文化及は、北歸を望む軍人らの懇望により、ついに煬帝を離宮に殺し、自ら擁立した楊浩（煬帝の弟俊の子）をも弑し、新しい國を開いて許と號した。しかし、彼自身も翌年、聊城において竇建徳に殺される。こうして、中原の混亂はしばらく續くが、最終的に勝利を掌中におさめたのは、李世民（太宗）という智謀すぐれた軍略家を擁する唐であつた。

ところで、世南ははじめ宇文文化及に従つていた。しか

し、化及が殺されると、竇建徳に捕えられ黃門侍郎を授けられた。因みに言えば、この時、歐陽詢も太常卿を授けられている。武徳四年（六二二）、世民は建徳を降し、世南を引き秦府參軍とし、ついで記室に任じ、後、世に名高い玄武門の變（六二六）で兄の建成・元吉を殺し、自ら皇太子になるや、太子中舍人に任じた。世民と世南の運命的な出合いは、このように唐初の國家混亂の際に行なわれたのである。

この頃の世南には以下のようなエピソードが傳わっている。つまり、武徳元年、宇文化及は煬帝を江都の離宮に殺したが、その際、累は世基にも及ぼうとした。世南は必死で兄の助命を嘆願し、自ら兄の身代りになって死ぬことさえ願ったが、結局納れられなかった。そのため悲しみに打ちひしがれ、「骨立」、つまりあたかも骨ばかりで立っているかの如くに瘠せ細った、というのである。

唐は武徳七年（六二四）まで反對勢力驅逐のため、軍事に慌ただしく、文化面を顧みる暇は無かった。しかし、この年、四海がほぼ平定されると漸く文化面にも意を用いはじめた。特に高祖の譲りを受け（六二六）て即位した世民すなわち太宗は、文教に意を注いだ。宮中の弘文館に四部の羣書二十余萬卷を集め、虞世南・褚亮・姚思廉・歐陽詢らに校勘の任務を命ずるとともに、彼ら

を順番に宿直せしめ、夜のふけるまで古今の政治、或は人物について語りあつた、と言われている（『唐會要』卷六十四、宏文館）。太宗の文教にかける並み並みならぬ情熱を物語るものであろう。

さて、問題の書の面を瞥観すると――

貞觀元年（六二七）、太宗即位の年、彼は虞世南と歐陽詢に命じ、文武官の五品以上の子弟で、弘文館に出入を許可された者に對し、楷法を教示せしめた（『唐六典』卷七、『唐會要』卷六十四）。

元來、太宗は書に對しても並み並みならぬ興味を持っていたと言われている。この天子が即位以前、書に興味を寄せていたという信頼すべき記録は無いが、『龍城錄』（柳宗元撰）と題する書物は、以下のように面白い話を傳えている。つまり、太宗は幼時濟南の人、王宏と共に學び、王宏に八體の書を教授された。すでに帝位に即いた後、宏を訪ねたが、郷人は彼が隠去したことを傳えた。王宏という人物は子陵（後漢の隱士嚴光、字は子陵？）の仲間であろうか、というのである。この書は怪異譚が多く、右の逸話も信憑性に乏しいが、少なくとも太宗が幼時より書學に興味を示し、書に並み並みならぬ情熱をかけていたという事實の上に成つたものであろう。

彼が書家の中でも特に好んだのは、言うまでもなく王

義之であった。しかも、それは酷愛と言っていい程のものであった。『晋書』王羲之傳の贊で「心慕い、手追うは此の人のみ、其の余の區區たるの類、何ぞ論ずるに足らん哉」と絶贊し、蘭亭序を自分の墓陵にともに埋めさせようとしたという事實にそれが歴然と表われている。

が、太宗が羲之の書を好んだという事實は世南にとって、事は眞に有利に展開した。と言うのも、先述したように、世南は智永に王羲之流の書を學んでいたからである。

周知の如く、隋は北から起こつて南北を統一した王朝であり、その尊ぶところの書も、中原を支配していた漢王朝の隸書であった。南朝の傳統である王羲之流の華麗妍媚の書風は、これを取らなかつたのである。しかるに隋にかわつた唐になると、太宗は羲之を好みその書を酷愛したのであった。智永に書を學び、遠く右軍を祖述していた世南にとって、これは非常に恵まれたことであつたと言わざるを得ない。無論、太宗にとつても羲之の書風を傳える世南は貴重な存在であつた。そこで『宣和書譜』（卷一、太宗傳）に見えるが如く、書において太宗は世南に師事した。

貞觀三年（六二九）には、太宗は文教興隆をめざして長安に再建した孔子廟に碑を建て、世南に命じて楷書體で碑文を書かした。これが有名な孔子廟堂碑である。

世南がこの碑の拓本を進呈するや、太宗は甚だ喜び、王羲之が佩びていた「右將軍會稽內史」の黄金印を世南に賜つたとわいれるほどに、その出來榮えも素晴しかつた。

また確とした年代は不明であるが、恐らくこの頃のことであろうか。太宗と世南には以下のような微笑ましいエピソードも傳わっている。ある日、戈脚の工みならざるに惱んだ太宗は、たまたま「戩」字を書いた際、「戈」字の箇所を空け、世南に付け足させた。そして、自信満々に、かの直言居士として知られる魏徵に示した。ところが徵はただ一言、「戩字の戈法、眞に逼る」と言い、その正體を見破つた、というのである（同上）。當代の英雄太宗が戈脚にほとほと惱み抜いている姿、世南が見るにしかねて助力している様子、澁面を作って傍らに立つ魏徵のありさま、三者三様の性格の斷面を示すこのエピソードは何とも微笑ましい一幅の繪ではなからうか。

貞觀十年（六三六）、世南は太宗の皇女、汝南公主のために墓誌銘を書いた。この稿本は現在に傳わっている。

このように、太宗は書を好み、書家世南は彼の庇護のもとにその天分を充分に開花させていくのである。

しかし、太宗が書家としての世南のみを評價したかと言え、決してそうではなかつた。正史によれば、太宗

はつねに「德行・忠直・博學・文詞・書翰」と、世南の五絶を稱したと伝えられている。この中、下三つが書をはじめとする文學・藝術面の才能を言うとするれば、上二つは政治的な才能を言うものであろう。太宗は、臣下として常に德行・忠直の態度を保ち續けた政治家としての世南を、書家としてと同じく高く評價したのである。蓋しそのためであろう、兩者の運命的な邂逅以來、世南は衰老を理由にしばしば致仕を願ひ出たにも拘らず、逆に目ざましい出世ぶりを示した。すなわち著作郎から秘書少監へ、さらに秘書監へ、そして永興縣子を賜わり、ついで永興縣公へ昇進するという出世ぶりであった。

しかし、世南は太宗の慧眼によって官を累遷しながらも、あくまで卑屈な態度に陥ることはなかった。煬帝に「峭正」と嫌われた性格は太宗の前でも遺憾なく發揮されたのである。

例えば貞觀八年（六三四）、隴右の山が崩れ、大蛇が現われ、山東及び江・淮を大水が襲ひ、引き續き天に慧星が百余日も現われて消えないという不祥事が起こった。

太宗は憂慮した。世南はこの時、徳を修めることの必要性を強調し、太宗に居すまいを正させた。翌年高祖が崩じた。彼は「園陵の制度、務めて儉約に従え」（『舊唐書』高祖本紀）という遺詔を残した。太宗はこれに従わず陵

墓を隆厚にしようとする人民を督促したが世南は毅然としてその不合理を説き、一步もしりぞかなかつた。結局、太宗は譲歩せざるを得なかつた。⁽²⁾

更に、世南は太宗の個人的性癖にかかわることにまで躊躇なく立ち入って諫言した。つまり、太宗が收獵を好み、しばしば出かけるのを、危険なことであり、天子にあるまじき輕々の行爲と語氣鋭く諫めたこと、並びに太宗が宮體詩を作り、世南に廣和せしめようとした時、これを「體、雅正に非ず」（『新唐書』）ときめつけたことなどである。

いったい、人はその個人的性癖にまで立ち入って忠告されると自尊心を傷つけられたように感じるものである。況んや天子の場合にはなお更のことであろう。しかし帝國の基礎を不動のものにしようと思ふ太宗にとつて、世南の嚴しい諫言も期待通りものであったに違ひない。世南の「峭正」と嫌われた性質も太宗には歓迎されたのである。

世南に死が訪ずれたのは、彼八十一歳の年、貞觀十二年（六三八）の五月のことであつた。その前半生が波亂に富み、かつ不遇であつたのに較べ、榮光につつまれた靜かな死であつた。死後、東園の秘器を賜わり、昭陵に陪葬され、禮部尙書を贈られ、文懿と諡おくりなされた。

太宗は世南の死に際し、慟哭したといわれる（『隋唐嘉話』）。正史はまた、太宗が悲嘆にけると同時に回想に耽り、「當代の名臣、人倫の準的」と稱賛したこと、並びに世南と自分の關係を鍾子期和伯牙にまで喩えたことを傳えている。これは、初唐の書家として世南と並稱される歐陽詢の本傳がその死に際し、何ら特別の記録をとどめぬのと好對稱である。

しかし、太宗にとつて書の師としての世南を失ったことは、とりわけ深い悲しみのまゝであつた。太宗が世南の死後、共に書を談じる者がいないと嘆いた話は『唐朝叙書錄』、或は『宣和書譜』卷三、褚遂良傳などに傳わっている。蓋し、太宗は羲之の傳統的書風を繼ぐ者として、歐陽詢よりも虞世南をより高く評價していたのである。

右に世南の經歷を若干のエピソードを折りまぜつつ述べてきた。この經歷が示すが如く、世南は唐に入つて以來、官界に重きをなすと同時に書家としての盛名を勝ち得たのである。書家としての世南を考える際、その天分の十全の開花という點で、太宗との出合いはとりわけ決定的な影響を持ったようである。

ところで世南の性格は如何なるものだったろうか。右

にも明らかであるが、もう少し検討を加え整理してみよう。

かつて世南は、隋の煬帝に仕えた時、その「峭正」を嫌われたということは再三述べた。「峭」は「隋」とも書き『説文』の段注によれば「凡そ斗直なる者を隋と曰う」とある。つまり山の姿のけわしく、まっすぐに切り立つさまを言う。しかし、ここでは正論を體して後へひかない厳しさほどの意味である。

彼の性格の厳しさは「志性抗烈」（『新唐書』）といった強い言葉で述べられている。正史はまた彼の諫言のさまを評して、

其有犯無隱、多此類也（『舊唐書』）

と言ひ、太宗も世南の死に際し、

吾有小失、必犯顔而諫之（同上）

と述べたと傳えている。「犯」或は「犯顔」は、言うまでもなく『論語』憲問篇の孔子の言葉に本づく。⁽³⁾つまり、臣下たるもの君に對すれば正論を體して毅然たる態度を有ち、阿諛追從、面從後言の姑息な態度であつてはならぬというのである。「犯」「犯顔」とは、君に對する最も強硬な諫言である。

これらの評によって、浮かび上がってくる世南の姿は、あたかも『禮記』儒行篇に理想的姿として描寫される儒

者の態度の如きであり、そこに見られるのは、背骨に一
本まっすぐに通った烈烈たる氣骨である。

世南の性格の一特徴はこの烈烈たる氣骨と言つてよい
であろう。この氣骨が煬帝に「峭正」と嫌われたもので
あり、逆に度量の廣い太宗には「太宗以是益親禮」（『舊
唐書』）とされた理由であつた。

なお『新唐書』本傳の贊には「世南鯁諤」と見える。
鯁とは、魚の骨であり、この場合は性格の頑かたくなさ、固さ
を言う。諤は諷が本字であり、遠慮なくずけずけ言う意
味である。「鯁諤」も世南の人一倍強い氣骨を言つたも
のであろう。

ところで、世南にはこういう、いわば理想に殉ずるよ
うな強い氣骨が窺える反面、また人間味あふれた優しい
一面も見られた。すなわち、先述したように、正史には
字文化及が世南の兄、世基を殺そうとした時、世南は身
代りに死ぬことを嘆願した。しかし、これが納れられな
かつたので、哀毀骨立と言われるほどやせ細つた、とあ
る。『貞觀政要』には同様の事件を記録するが（卷五、
孝友）、才直の注には「愚按……蓋其溫恭豈弟、出於天
性云」という。才直は世南の天性を「溫恭豈弟」と評價
したのである。

「豈弟」とは「凱弟」、或は「愷悌」とも書き、典故

は多く『詩經』に本づく。⁽⁴⁾ 大雅、旱麓の一句、
豈弟君子、干祿豈弟

の釋文に「豈は樂なり、弟は易なり」とある——つまり
樂しみやわらいださまと言うが、嚴緝の説に「豈弟者、
德盛仁熟、和順光積之謂」という——すなわち人間が本
來備えている優しさが充分に伸長發揮されたものであり、
才直の場合にはこれが適切であろう。

事實、世南には先に觀察した如き正論を體して退かぬ
強さ、嚴しきがある反面、溫恭豈弟といわれるにふさわ
しい人間的な、豊かな感性に恵まれた一面も見られたの
である。

例えば右の例以外に天嘉中に父を失つた際、「世南尙
幼、哀毀殆不勝喪」（『舊唐書』）と言われたのもその感じ
やすい魂、すなわち豊かな感性を物語るものである。同
様に叔父の寄が賊軍の陳寶應に捕えられた際も、布衣
疏食の生活を續け通し、無事生還した後、漸く肉食にか
えつたと言われる。これらは、並びに溫恭豈弟の性格を
如實に示すものである。

もちろん、この豊かな感性は世南の秀れた天性に由來
するものである。しかし、また一方、身體の虛弱という
肉體的條件も指摘できる。『舊唐書』本傳には世南を評
して「容貌懦弱、若不勝衣」というが「懦弱」とは、極

めて柔弱のさまである。ここでは顔色憔悴と言うに近い、蒼白く瘦せた容貌を想像すればよからう。「若不勝衣」とは、例えば梁の武帝の「白紵辭」に「纖腰嫋嫋不任衣」とあるように、これも着ている服にもよろけるほどの瘦せ細った弱々しさを表現するものである。彼は比較的長壽の方であったが、體力強靱ではなかった。この原因は彼の唐に歸したのが遅く、生理年齢がすでに高かった（六十四歳）せいもあるが。例えば、相似た經歷を持つ歐陽詢が「氣力弱猶未愈」（淳化閣帖）、「吾氣力尙未能平復」（同上）と嘆くように、世南も、

世南近臂痛、發書不堤觀縷也（樂毅論帖）、世南衰羸何甚、但有困劣（積時帖）、疲朽未有東顧之期、唯增慨嘆（疲朽帖）、世南從去月廿七八牽、一兩日行、左脚更痛（左脚帖）

と、しぎりにその身體的虚弱を嘆くのである。

虚弱な肉體は、人間を感性の世界に誘い、沈潜させ、しばしば多くの秀れた藝術作品を生み出す原因となるものである。と同時に、身體的虚弱を理解することは、廣く人間の持つ肉體的、或は精神的な弱さや脆さに對する理解、寛容の態度につながるものである。彼の虚弱な肉體は、彼の天性の豊かな感性を更に一層深め、また他人に對し、優しく溫和な態度をとらせたとと思われる。この

ようにみれば、世南のもう一つの際立った性格的特徴は、才直が指摘した如く「溫恭豈弟」と言つてよいであろう。つまり、彼の性格的特徴は一は「氣骨」、一は「溫恭豈弟」であつた。一見、正反對に見える性格が彼の人物の中には同居していたのである。この點、或は讀者に奇異の感を与えるかも知れない。しかし、次章において世南の書を考察しつつ、その點にも觸れていくつもりである。

三

世南の作品の現存するものは極めて少なく、しかも信憑性のおけるものは孔子廟堂碑、積時帖、汝南公主墓誌銘などの數點にかぎられているので、作品にそつた考察という點では資料不足を嘆かざるを得ない。そこで、先人の批評や論及を参考にしつつ述べていこう。

彼は何よりもまず楷書の大家として知られていた。このことは後世の論者の言をもち出すまでもなく、太宗が彼に命じて孔子廟堂碑を書かした、或は弘文館で歐陽詢とともに楷法を教示せしめた、という事實に明瞭である。

現存する孔子廟堂碑は貞觀の原石のおもかげを多く傳えていると言われる。⁽⁵⁾全體を俯瞰する時、「虞世南能整

齊不傾倒」(『鈍吟書要』)と言われるように、決して規矩を逸脱しない均整美、安定美、莊嚴美が窺える。一字一字に目をとめれば、暢達ながらも鋭さを示す波磔、横畫、縦畫に込めた氣力の強さ、肉を思い切り薄くし、筋骨のみで立つ孤高の姿といったものに氣づくであろう。

かつて衛夫人は「骨多く肉微なき者は之れを筋骨と謂う」(『筆陣圖』)と言い、骨肉の均整のとれた書を推賞し、筋骨、或は肉あって骨なき墨筈をしりぞけた。この論からすれば、世南の廟堂碑は筋骨の部類に屬するが、しかしなお我々はこの書の持つ莊嚴美、力強さといったものに感銘を受けるのである。

事實後世の論者の眼にも、世南の書はおおむね骨力筆勢の強い書風と目されていた。例えば、世南の書を能く繼いだ者として、族子纂がいたが『書斷』は

風骨不繼 (虞世南傳)

と論斷している。つまり骨格の鋭さから生まれる氣品は纂にはもはや受け繼がれず、世南獨得のものだった、というのである。

また、徐浩は歐陽詢と虞世南の書を鷹隼に、褚遂良と薛稷の書を鸞翟なぞに比えて批評しているが、その理由は

鷹隼乏彩、而翰飛戾天、骨勁而氣猛也、鸞翟備色、而翮翔百步、肉豐而力沈也 (『論書』)

というものであった。これも、世南の書の持つ骨勢雄強で、飛びあがって天にもいたるほどの嚴しい姿を指摘したものである。同様のことは『書契』にも「學永興(世南)書、第一要識其筋骨勝肉」(『藝概』所收)とある。

世南の書に見られるこのような特色は何に本づくのだろうか。

この特色に解決を與えるものとして、まず時代性を考えることができよう。この見解の代表者は康有爲である。彼は『廣藝舟雙楫』の中で、

隋碑風神疎朗、體格峻整 (卷三、取隋)

と隋碑を稱揚したが、それに關連づけて、おおむね以下のように述べた。つまり、歐陽詢・虞世南の書の持つ骨勢きびしい姿は、彼らが唐に入ったのが遅く、實は「六朝の人」、或は「隋の人」だったことに由來する、と(卷三、備魏、取隋、卑唐)。つまり、彼らはその前半生を六朝、或は隋の時代に送った結果、書風もその時代の影響を受けて強く嚴しいものだった、と言うのである。人間は時代の制約を受けることが多いとすれば、これも卓見であろう。

第二に用具面の影響も考えることができる。明代の隨筆『五雜俎』は次のような興味深い話を傳える。

宣州の陳氏は代々の筆作りであり、その家には王羲之

が筆を求めた手紙まで残っていた。ある日、柳公權が筆を求めに來たので老工は子に告げて、王羲之が愛用した極めて剛い毛の筆（鼠鬚筆）を渡さしめた。ところが柳公權はこの筆を用うるに堪えないものとして返しに來た。そこで、常筆を渡したところ今度は大いに喜んだ。老工はそれを見て、

余謂柳書與王所以異者、剛柔之分耳、右軍用鼠鬚筆、想當苦勁、非神手不能用也、歐・虞尙用剛筆、蘭臺（柳公權）漸失故步（卷十二）

と嘆息したというのである。この逸話によれば、世南は晋の風尙を受け剛筆を用いていたことが分る。因みに、鼠鬚筆とは栗鼠（りす科の哺乳動物で、いわゆる家鼠ではない）の尾で作った筆であり、「其の鋒は乃ち兎より健なり」（同書、卷十二）とある。思うに、この筆が彼の書に骨力雄強を生み出した一要因でもあつたらう。

しかし、藝術は自然科學と違い、時代性、用具面の影響を受けることがあるとはいへ、結局個性の支配する面が最も大きいことは明白な事實である。筆者は世南の書を持つ骨力雄強の特色を、何よりも前章で考察した彼の性格と關連づけたい。

しかし、その前に世南の書の特色が骨力雄強とされるような強さ一方ではなく、柔らかさも兼ね備えていたと

いう事實を述べることにして、その性格との關連は後述しよう。

世南の書はしばしば、穩健と評されるように、その楷書にも悠揚せまらぬ柔らかさを備えていた。この特色はこれを同時代の楷書の大家として世南と並稱される歐陽詢と比較すれば明瞭である。

歐にも古來、楷書の典型とされる九成宮醴泉銘が傳わるが、この作品は文字の結體を背勢に作り、結構は嚴正、字と字の空間にも計算されつくしたかの如き緻密さがあり、いかにも幾何學的に構成された鋭くひややかな感じを與える。一方、世南の廟堂碑は全體として均衡を保ちながらも、連なつた三、四字を觀ると微妙なバランスの崩れをさえ感じる。例えば「洛觀河膺符受命」の上三字と下三字の續き具合など。字と字の余白のとりかたも緻密さは感じられず、むしろ曖昧で心のおもむくままにまかせた、といった印象なのである。歐の字の横畫から直畫へ轉じる所は、いかにも硬直な方筆である。が、世南のは一見方筆にみえて、方圓が度に合している。上記のような違いが世南の書にいかにも柔らかさを與えているものであらう。

事實、歐の書と比較しつつ虞書の持つ柔らかさに言及した評は、古來數多い。有名な『書斷』は兩者の優劣を

論じつつ、

虞則内含剛柔、歐則外露筋骨
（虞世南傳）
と斷じた。

もと歐陽詢も王羲之の傳統的書風を繼承した人である（新舊唐書、本傳）。しかるに初唐の書壇をリードした二人は、共に王風を繼承しながらも、その書風には微妙な相違がみられたのである。この意味は、歐の書は外に筋骨を露わに示したものであるが、虞の書はその強さを内に柔らかく包みこんだものだと言うのである。同じく同書、虞世南傳に、

歐若猛將、

同書、歐陽詢傳に

有龍蛇戰鬥之象、

森森焉若武庫矛戟、

と、歐の書を兵器、或は戰鬥の姿に喩えて批評するのその外面に現われた強さを指摘する、と同時に一方で世南の書の持つ外面的柔らかさを暗示するものである。

『書槩』も「虞永興（世南）書、出於智永、故不外耀鋒芒、而内涵筋骨、徐季海（浩）謂歐虞爲鷹隼、歐之爲鷹隼易知、虞之爲鷹隼難知也」と述べる。世南の書は内に厳しい強さを含んでいながら、外は柔軟に見える、そのため徐浩が歐・虞は鷹隼と言った（『論書』）が、人々は

歐の鷹隼であることは分っても、世南の鷹隼であることは理解しがたいと指摘するのである。

虞得右軍之圓、歐得右軍之卓、
（『論書臆語』）

と言うのも、歐書と比較しつつ、右に述べた世南の書の特徴を的確に把握したのと言うことができよう。ところで、世南書の持つこの特色について、それは風土に根づく傳統だと指摘したのは阮元であった。ここで、彼の分析に觸れておくことも世南の書理解のための一助となるであろう。

阮元によれば、北朝の書家、例えば索靖・盧誕・趙大深・丁道護らを北派とし、南朝の書家、例えば王羲之・獻之・僧虔・智永らを南派とする。そして、各派の書の特質を、

南派乃左江風流、疏放研妙……北派則是中原古法、

拘謹拙陋、

と規定した。彼によると、歐陽詢の書の方正勁挺は、實は北派の傳統を繼ぐものであり、虞書の持つ柔らかさは南派の傳統に立脚するものだというのである。つまり、その風土に根づく傳統が彼らの書の特色となって表われたと理解するのである（『南北書派論』）。

しかし、書の特徴を南北に分けて、すべてこのように圖式的に割り切って理解するのも、どこか釋然としない

ものが残る。因みに阮元は、歐陽詢を北派とするが、歐の出身地は長沙であり、南朝の人である。その上、理論が先行したため、武斷に傾むいた所を指摘できぬでもない。⁽⁶⁾『書槧』は、

論唐人書者、別歐、褚爲北派、虞爲南派、蓋謂北派本隸、欲以此尊歐、褚也、然虞正自有篆之玉筋意、特主張北書者、不肯道耳、

と述べている。即ち唐人の書を論ずるものが南派、北派と分類するのは漢代の隸書の余波を受ける北派を尊ぶんがためばかりのことだ、と指摘するのである。『書槧』は『南北書派論』に典型的に見えるこのような獨斷的意見を排し、世南の書には篆書の持つ力強さが窺えると言うのである。逆に北派の歐陽詢も、本傳によれば南派たる羲之の書を學んだとされるのである。阮元の着眼點と分析は鋭いがやはり書の特徴を南北で割り切つて理解するのは無理である。この點に關しても、筆者はやはり世南の性格と關わる部分が大きいのではないかと考える。さて、世南は右に述べたように楷書體を得意としたが、同時にその書は歐の楷書と比較すれば分明なように悠揚せまらぬ穩健さを示し、そこには柔らかさが見られた。この特色はどこに由來するのだろうか。

世南が前章で述べた如き、際立つた性格的・二面性を持つ

っているとしたら、それらを彼の書を持つ特色に對比させても、無理はないのではなからうか。ここで少しく前章をふりかえつてみることにしよう。

世南は「志性抗烈」と評されるような毅然として屈せぬ氣骨を備えていた。と同時に、一面「溫恭豈弟」といわれる優しきをもあわせ持っていた。が筆者は決して世南を二重人格者と見なしているのではない。恐らく、世南はその生涯の多くの場合、氣まめじで、固くこわばつた表情で朝廷、或は家庭に在り、頑固もので融通が利かないと評されていたに違いない。しかしその表情が——恐らく數少なかったが——時に繊細な感性を刺戟されて顔れ、なりふりかまわず滂沱たる涙を流すこともあつたのである。宇文化及に殺されんとした兄のため身代りに死ぬことを嘆願した例が、その典型的なものであろう。つまり、世南は自らを律することきつく、外面には厳しい姿を示しながらも、案外、心のうちは優しく涙脆い繊細な感性を持つ人情家であつたのではなからうか、沈靜・寡欲・志性抗烈と、一見ストイック、リゴリズムと言われるに近い固い殻を外に示しつつ、その實内部には人一倍の優しさを秘めた人物ではなかつたらうか、というのが前章で述べたかつた所である。

世南の厳しく激しい氣骨は、書の中でも規に應じ矩に

入る、或は整整齊齊といわれるような、あくまで規矩に
適い、法度を逸脱しない楷書體を最も得意とした。しか
し、溫恭豈弟と評される彼の内面の優しさが、その書に
も自然に滲み出し、悠揚としてせまらぬ柔らかさを生み
出していたと結論してもいいのではなからうか。

ところで、書の持つ柔らかさは、本來、行、草作品で
最も十全に發揮される性質のものである。とすれば、世
南が行、草作品にも意を注いだことは想像に難くない。⁽⁷⁾
彼の行・草作品が早く散佚し、多く残らないので、議論
の據り所を見失う恐れがあるが、左脚帖・積時帖、特に
後者を見れば、世南の筆の柔らかさが充分發揮され、い
かにもリズムミカルで變化に富み、かつ婉麗で艶やかな姿
に結晶しているのを發見するであらう。

この點について『書斷』は的確にも、
其の書（世南の書）、太令の宏規を得（虞世南傳）
と言ひ、包世臣も、

永興の書、太令に源あるを見る（『安吳論書』述書上）
と太令からの影響を指摘している。

太令とは、言うまでもなく義之の子、王獻之である。
獻之の書は「骨勢不及父、而媚趣過之」（『古來能書人名』）

「獻之始學父書……筆迹流憚、宛轉妍媚、乃欲過之」

（『論書表』）と言われ、媚趣、宛轉妍媚と、その婀娜た
る色っぽさが義之よりまさっていたと評されている人物
である。世南は獻之の影響も深く蒙ったのであらう。

我々は諸々の批評家言、例えば『書後品』の

羅綺春に嬌^{なまめ}ぎ、

婉鴻沼に戯れるが如し、

の艶美な比喩によって、彼の——特に行・草作品の持つ

——婉麗な艶やかさを想い、『書斷』の

秀嶺危峰、處處間起す、（虞世南傳）

或は『宣和書譜』の

太華に登るが若し、百盤九折し、委曲して杳冥に入

る（虞世南傳）

によって、そのリズムミカルな千變萬化の態を想像するこ
とが可能である。

しかも、他の名流に比べても世南のこの特色は分明で
あった。すなわち『書後品』は、その師、智永の書につ
いて、

精熟は人に過ぐ、惜しむらくは奇態無し、

と、その變化に乏しい様を指摘するが、世南の書は先に
みた如くリズムミカルで變化に富むのがその特色であった。

『書斷』は、歐陽詢について

風神は智永より嚴し、潤色は虞世南より寡^{すく}し、

と、潤色の少なさを言うが、積時帖がティピカルに示すように、いかにも世南の書は優婉艷美の風を示す時があった。

これらの批評からも分るように、世南の偉大な點は、後世法度に拘束され平板に墮しすぎたと言われる初唐の書壇に、右のように潤色あり、しかも變化に富む書風を残したことであろう。⁽⁸⁾

ところで、この點に關し、筆者は最後に世南と張旭の關係について少し述べておく必要を感じる。

張旭は人も知る狂草の創始者である。唐も開元、天寶の時代になると、法度に拘束されすぎた書に不満を抱き、それを超克しようとする運動が起こったが、彼はその代表者であった。杜甫の「飲中八仙歌」に歌われた自由奔放、傍若無人なふるまい、或は『新唐書』の傳(卷二〇二)に描かれた酔いにまかせた豪快な揮毫ぶりなどによって、權威傳統に對する反發と、新しいスタイルを生み出そうとする苦惱をみてとれるが、しかし張旭はその根底に堅實な書法の基礎を備えていたと言われる。例えば、黄山谷の題跋に「張公、姿性顛逸なるも、其の書、字字法度の中に入る」(卷四)、『宣和書譜』に「一點畫も規矩に該せざる者無し」(卷十八、張旭傳)と言うが如くである。事實、彼の作品とされる、郎官石記(楷書)の存

在によって、右の評が正鵠を射たものであることを充分知ることができよう。

ところで、筆者にとつて興味深いことは、張旭の家系が世南の家系と遠いながらも因縁を持つという事實である。つまり、『書史會要』に、陸彥遠は父の書法を張旭に傳えた。張旭は彥遠の甥である、という記述がある。

ここにいう彥遠の父とは、陸東之であり、すなわち虞世南の甥である。陸東之は世南の書を學んだとされている。このように、家系の面で世南と張旭はつながりを持ち、しかも若い頃の張旭は陸東之を通して間接的に世南の書の影響を受けたと言ふことができるのである。

しかも、なお興味深いことは陸東之が虞氏の草體を學ぶ

虞氏(世南)の書を學び、多く行字を作る

『書後品』(『宣和書譜』卷八、陸東之傳)

と言われ、特に世南の行・草體を學んだとされていることである。尤も陸東之の作品が少なく、このことのみで、世南・東之と張旭の狂草とのつながりを云々するのは早計である。張旭自身も「初め公主の檐夫、道を争うを見、又、鼓吹を聞きて筆法の意を得。公孫の劍器を舞うを觀倡して、其の神を得たり」(『新唐書』)と自らの筆法の悟達を述べているからである。

しかし、彼が彦遠を通して柬之の書を學び、柬之の書を通して間接的に世南の書を學んでいたという事實は否定することができない事實でもある。

翻ひらつてみれば、すでに世南より少し後、すでに傳統的な型にはまった、楷書に不満を抱く人々が出て來ていた。褚遂良は世南より四十年ほど後輩の人で、はじめ世南に習って、後、右軍を祖述した、と言われる。しかし、現在傳わる彼の作品を見ると、羲之の拒否した隸法を多分に採り入れて獨自の書風を樹立している。薛稷も遂良より五十餘年後輩であるが、彼も新奇な書風の創造に向かつて進んだ（『中國書道史』卷八、神田喜一郎）と言われる。このように、中央の書壇にもすでに傳統的書風を革新しようとする氣運が生じていたのである。

張旭は漸次勢を増してきたこの革新的氣運の高まりの中に生を享け、この氣運に乗じた。彼は自分の家系につながる高名な世南の楷書を學びつつも、一方で傳統的書風から脱皮しようと懸命の努力を重ねていたのではなからうか。書の各體の中でも、最も自由に腕が揮ふるえ、個性の發揮をゆるすものは言うまでもなく草書である。彼は自由な草書で存分に天分を示したが、その場合、世南の行・草が一種の脱傳統のヒントにもなり得た、と想像するのは無理だろうか。

恐らく、リズムカルで變化に富む世南の行・草は張旭に影響を與え、その狂草を生み出すに資する所、少なくともなかつた、とみてさしつかえないのではなからうか。

張旭の楷書が世南の影響のもとにあるという指摘は『書小史』⁽⁹⁾などにすでに見えるが、草書が世南の影響を受けていることを鑑識鋭く見抜いたのは包世臣であった。彼は唐人の草法について、張旭・錢醉僧・楊少師の三家を推し、張旭の書について、

張長史（張旭）の書は、虞（世南）、陸（柬之）に源あり。……（張旭の）千文殘本二百餘字、伏して虎の臥するが如く、起ちて龍の跳るが如し、頓は山の峙するが如く、挫は泉の流るるが如し、上は永興（世南）に接す、（『安吳論書』歷下筆譚）

と述べている。つまり、張旭の千字文の千變萬化の態―「龍虎の氣」（同、論書十二絕句）が、世南の書に深く關連する、と大膽に指摘するのである。

現在に傳わる千字文は、いかにも酔いにまかせたといつて不思議でない狂逸の態を示している。これが張旭の眞筆のおもかげを如何ほど傳えているか疑問もあるが、筆者はその行間の霧圍氣、左馳右驚しながらも、全體として一種の氣品を保ち、粗雑に流れていないという點から、僞筆、眞筆は問わずその眞彩の一部は充分に示して

いるものと思つている。

包世臣の指摘は甚だ思い切つた指摘であるが、筆者が右に述べてきた所を考えれば、それほど危険な指摘でもないようである。

いつたい、先述した如く世南の行・草は「秀嶺危峰、處處間起す」(『書斷』虞世南傳)と言われ、また「潤色」で特徴づけられるように、リズムカルで變化に富み、かつ婉麗でもあつた。しかし、それは「五方の正色を含み」(同上)とあるように、あくまで正統を守り、規矩に適いデカダンに墮するものではなかつた。「善く處を學ぶ者は、和して流れず」(『書槩』)と言われる所以である。

翻つて、張旭の書も「張顛、顛せず」(『宣和書譜』張旭傳)、或は「旭に至りては非短する者無し」(『尊唐書』本傳)と論評される如く、堅實な基礎の上に成立したものであつた。その狂草と稱されるも、實は確たる法則に適つたものであり、ましてや、デカダンに流れたものではなかつた。蓋し、彼が世南の書の眞髓を的確に把握し、和して流れなかつたせいであろう。

筆者は、張旭が世南の影響を蒙むること想像以上に深かつたのではあるまいかと考えるのである。

四

右に世南の書と人について述べてきた。彼の書は「筋骨肉に勝る」と言われるような強さで特徴づけられながらも、一面、柔らかさを備えていた。世南のこの特色を彼の「志性抗烈」、或は「鯁諤」と評される氣骨ある性格と「溫恭豈弟」と言われる優しい性格と關連づけながら述べてきたのである。

彼の書の持つ卓越性は、整整齊齊を尊んだ結果、平板に墮した唐の書壇に、一つの變化に富む書風を残したことであろう。この點に關し、張旭との關係についても述べた。

ところで、性格と書の關係——即ち氣骨が強さに對應し、豈弟が柔らかさと對應するという必然性の論證が淺すぎるとの疑問があるかも知れない。しかし、筆者にとつて、性格と書がとりわけ深く密接な關係を持つこととは、當然のことに考えられた。そして、氣骨が楷書體という、決して規矩を逸脱しない嚴格な書體とつながりを持ち、豈弟がその楷書體の中にも柔らかさを生み出している重要な要素であることも、論證以前の自明の理と思われたのである。筆者にとつて、むしろ世南の經歷に探りを入れ、その中から彼の性格の特徴を抽出するほ

うがより困難な仕事だったと言つてよい。その結果、幸いに際立った性格の二面性を採り得たので、後はそれを書の二面性に對應させ、彼の書の持つ特色を解釋したのである。

世南と張旭の關係も、假に二者の關係を深いと斷言するならば、根據の不十分が指摘されるかも知れない。この指摘は當然であろう。張旭は、その書道史上に占める位置は重要でありながら、確實な生歿年は不明であり、作品も彼の眞跡と斷定できるものは何一つないという、半ば謎に包まれた人物なのであるから。一方、世南の作品も極めて少ない。そのため、兩者の關係を言おうとすれば、勢いロマンチックな想像力に頼らざるを得ないことになってしまうのである。

しかし、包世臣の指摘もあり、また兩者は遠いながらも家系のつながりがある。張旭が陸彦遠を通して陸柬之の書を學び、柬之が世南の行・草體を學んだ、となれば、張旭の書の中に世南の影響のあることはむしろ當然であろう。彼が意識して世南を學んだと言ひ切るのは、餘りに想像に傾むいたとされるかも知れないが、初唐の大家で古今の名手、盛名赫々の世南の書を學ばなかつたとする方がむしろ不自然なではなからうか。況んや、それが自分の家系につながりを持つ人物ならば。このように

考え、資料不十分を嘆きつつも、敢て世南と張旭のかかりについて述べてきたのである。しかし、筆者は世南の張旭への影響が想像以上に深かつたのではあるまいかと指摘するにとどめたばかりで、それ以上のことを斷言したわけではないのである。

最後に彼の書論『書旨述』、『筆髓論』についても考察し、あわせて世南理解に供したかつたが、考えるところもあり、後の機會に譲ることにした。

△付記△ この論文を書くにあたり杉村邦彦氏の「王羲之試論」(『書論』第三號)から得る所が随分ありました。記して謝意を表します。

(注1) 吾昔有伯英草書十紙、過江亡失、常痛妙迹永絕、忽見足下答家兄書、煥若神明、頓還舊觀

(2) 最初は長陵(漢の高祖の陵)の高さ九丈に從う豫定であつたが、結局、原陵(唐の光武帝の陵)高さ六丈に從うことになった。

(3) 子路問事君、子曰、勿欺也、而犯之

(4) 小雅の湛露・甫雪、大雅の泂酌・卷阿、齊風の載驅の諸篇などに見える。

(5) 二玄社「書跡名品叢刊」(虞世南孔子廟堂碑)などによつて身近に鑑賞することが可能である。なお翁方綱の『孔子廟堂碑考』によれば、貞觀の原石本もすべてが世

南の筆ではない。つまり全石二千十七字中、唐刻の文字は一千四百四十六字、その他は王彥超の覆刻した陝西本で補い、また後人が拓本に筆をいれた文字もある、と言う。しかし世南の眞彩は充分に傳えるものである。

(6) 例えば、「夫唐書稱（歐陽詢）初學義之書、從帝所好權詞也」と言う。つまり阮元は歐陽詢を北派とするのに固執し、唐書に彼が王羲之（南派）を學んだとあるのは、太宗の好尚に従った史家の權詞だと述べるがこれなどは武斷にすぎると思われる。

(7) 『書斷』は世南の行・草作品をその楷書と同じく妙品に入るとしている。また、世南が行・草を得手としたこ

とは、同書虞世南傳に「行・草之際、尤所偏工」とあり、また『書後品』にも「眞・草惟命」と言う。

(8) 「虞世南について」内藤乾吉『中國書道全集、第七卷、平凡社』参照。

(9) 『書小史』卷九、「旭以善草得名、亦甚能小楷、蓋虞褚之流也」

(10) 現在傳わる『筆髓論』はすでに余紹宋が指摘する如く、世南の作とは認めがたい（『書畫書錄解題』卷九）。また『書旨述』は書の各體を論じ、王氏一族の書を贊美した極く短かい著作である。世南の書と人について述べる小論の本旨に餘り關係はないと考えてここでは無視した。